

米田佐代子さんをお迎えし、「平和学習」を実施しました

「77年前、土浦のこの地は戦場だった～16歳で戦死した兄を探す旅～」

予科練の跡地である本校は、かつて阿見大空襲で亡くなった280人以上の予科練の少年たちを荼毘（だび）に付した場所です。彼らの名前を刻んだ慰霊碑は、本校の近くの法泉寺建っています。

講師の米田佐代子さんは、兄の吉二さん（享年16歳）を阿見大空襲で亡くし、母のひささんが戦後、90歳で亡くなるまで悔やみ続けた姿に接し、「なぜ兄は志願したのか」「なぜ母は志願を許したのか」「なぜ兄は死ななければならなかったのか」の答えを見つける旅を続けてきました。その模様は『ある予科練の青春と死』に上梓されています。母のひささんも、戦後ずっと自らの「無知の罪」と孤独に向き合い続けてこられました。晩年、「自分と同じように宝のような我が子を戦争で奪われる悲しみを味わう母親をなくすために」、手記『雲よ還れ』を書き残されました。



そして今、戦後77年を迎え、ますます非常に危うい世界、国になりつつあることを憂え、佐代子さんも御年88歳でありながら、母の思いを引き継ぎ、「兄の名が刻まれた慰霊碑の横にある高校の生徒のみなさんに直接話ができるのなら」と、「最後になるかもしれない土浦への旅」を自ら願って出たのです。

4時間目、一年生全員を対象の講演。生徒たちも熱心に耳を傾け、質問もたくさんしてくれました。「まじめで正義感のある子どもが幸せに、自分の言いたいことを言える世の中でなければいけない」「無知の罪に向き合い、真実を学び続ける大切さ」などについてお話しくださいました。

午後は「第1回図書館カフェ」として、希望者と語り合う場に講師として参加してくださいました。参加者からの質問に答える形で、研究してこられた「平塚らいてう」の話など、さまざまなお話が飛び出しました。その後、参加者が順に感想を述べ合いました。「心に余裕を持って、積極的に対話をして平和に貢献していきます」という感想が多く、米田先生も思いが通じたと実感されたようで、「ありがとう。」と、拍手を返してくださいました。



最後に、米田さんと有志で法泉寺の前の慰霊碑に参拝しました。米田さんが学校へ戻る道すがら、野球部やテニス部など、それぞれのユニフォーム姿に着替えた一年生たちが、「先生、今日はありがとうございました。」と大きな声で話しかけてくれました。米田先生は本当にうれしそうに、「私の話を聞いてくれてありがとう。」と一人ひとりにむかって返していました。

（文責：橋内敏江）